

わたしたち
の
奪われた日常集



ふつうの日常は奪われて、被爆者の日常になった。

今日は国際平和デーですが、

世界は平和と逆行しているようにも思えます。

戦争が長期化し、

核兵器の使用リスクが高まるいまこそ、

戦争や核兵器がもたらすものを忘れないでほしい。

そんな願いとともに、本日の紙面では長崎新聞が

1996年から連載している「私の被爆ノート」から、

9名の被爆者の証言を紹介します。

一発の爆弾は、一瞬で7万以上の命を奪っただけではなく、

その後何十年にもわたって

被爆者の日常を奪い続けてきました。

被爆者の言葉はその苦しみを教えてくれます。

本日の紙面を小冊子にして、

日常のふとしたときに読み返していただければ幸いです。

多くの人に、被爆者の声が届くことを願います。

右腕の傷はたびたび化膿(かのう)した。見られるのが嫌で、高校卒業まで真夏でも長袖を着ていた。就職した後、長崎大学病院で右腕の傷の手術を受け、ようやく半袖が着られるようになった。

初田邦代(81)

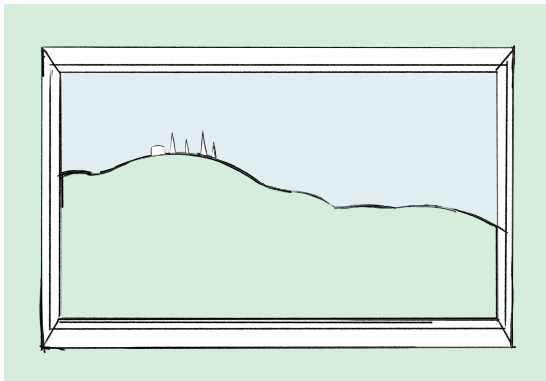
2019年10月31日掲載



約3年後、結婚して北九州に移り、4人の子宝に恵まれた。だが、夫は家主に「原爆に遭った人とよく結婚したね」「4人もいたら後妻は来ないよ」などとばかにされた。子どもたちは皆心臓が弱く、長女は2017年にがんで他界した。もしかしたら原爆の影響かと思ってしまう。

赤波江政子(96)

2021年6月3日掲載



数日後には体に異変が出始めた。下痢や発熱が度々起こり、週に何度も病院に通う生活が小学校の低学年まで続いた。原爆症という言葉がない時代。医者からは飲み薬を飲んで安静にするよういわれ続けた。病弱な体も落ち着き2児の母となっていた39歳の時に最初のがんが発症。手術で助かったが、放射線の影響におびえる生活が始まった。あの日一緒に実家で被爆したきょうだい3人もがんになった。3度目を患った同時期に娘にもがんが見つかった。2010年6月、入院する愛知の病院に向かう列車の中で訃報を聞いた。まだ39歳だった。生前の娘が、放射線の遺伝的影響の不安を友人に告げていたことを聞かされた。涙が止まらず、被爆した自らの体を責めた。

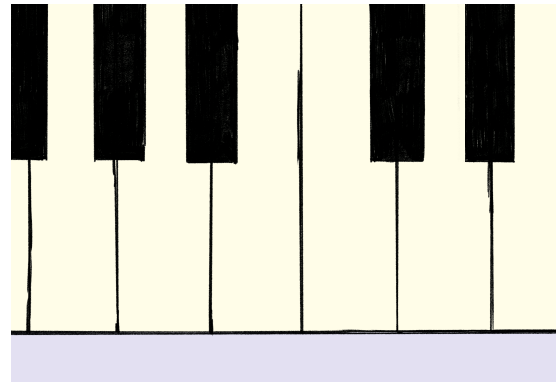
三田村シズ子(76)

2018年5月31日掲載

母は長い間、「どこかで生きている。必ず生きてる」と兄の生還を信じ続けていた。兄の同級生が線香を上げに来て「まだ死んでいないから」と言って拒んだ。40年後の85年5月、同じ工場で働いていた同級生が訪ねて来て「即死でした」と教えてくれた時に、ようやく兄の死を受け入れた。

青木聡昌(77)

2019年11月28日掲載



新大工に住んでいた人、竹の久保の人。歌が上手でいつも先生に褒められ、音楽の道を志していた女の子。みんな亡くなった。

それぞれに夢があったらうに、原爆が落とされたばかりに奪われた。真面目に工場に行った人は亡くなったり、けがをしたりしたのに、体調を崩して休んだ私は無事。「本当にすまないね」。そんな気持ちでいっぱいだった。

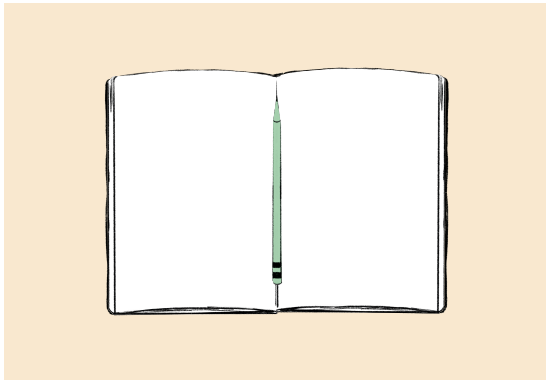
高橋清子(91)

2021年9月30日掲載

その後の生活は苦しく、私は7歳の時、南高小浜町木津(現在の雲仙市小浜町富津)に住む母の妹の家に引き取られた。それでも貧しさは変わらなかった。肩身も狭かったのでノートや鉛筆を買ってほしいと言い出せず、運動会の徒競走の賞品としてもらった文房具を使っていた。

吉田剛太郎(81)

2022年3月3日掲載



戦後、暮らしは一変した。父は農家になり、荒地を耕して米や麦を育てた。生活は苦しかった。姉は中学卒業後、大阪に働きに出た。私も中学卒業後は父を手伝った。長男の自分が残って、両親を支え、老後の面倒まで見るしかないと感じて決まっていた。農業を継ぐしかなく、何か別の仕事に就きたいなどと考える余裕もなかった。(中略)父は1967年に63歳で他界するまで、家族の分も含めて被爆者健康手帳の交付申請をしなかった。手帳を持つことで、大阪で暮らしていた姉が被爆者だと知られて結婚差別に遭うのではないかと、心配していたのだと思う。私たち家族が手帳を取得したのは父の死後の75年だった。

もし、長崎に原爆が落とされていなかったら、どんな人生だったろう。両親はつらい開墾をせずに酒屋を続けていたのではないか。被爆者への差別の心配もしなくてすんだんじゃないか。姉も私も進学できたんじゃないか。ふと、そう思うことがある。

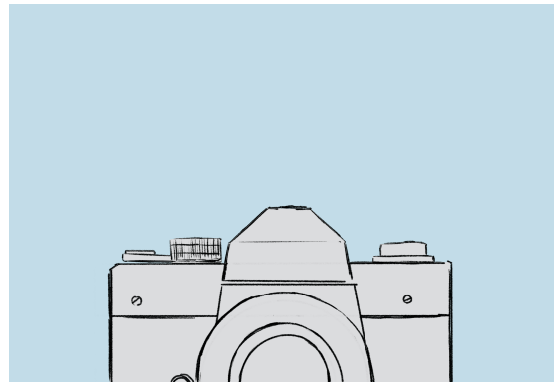
岩永義信(79)

2021年3月4日掲載

体のあちこちに32カ所の傷があった。太もものやけどの傷にうじ虫がわいたが、医者から「化膿(かのう)した皮膚を食べてくれるから治療になる」と言われた。髪の毛は全部抜けてしまった。終戦後は2年ほど親戚が運営する病院で入院生活を送った。左脚のくるぶしが痛くて歩けず、病気がちだった。回復して20歳で結婚したが、差別による破談が恐くて、原爆に遭ったことを隠していた。子ども2人を産んだ後に夫に打ち明けた。

宮崎昌子(90)

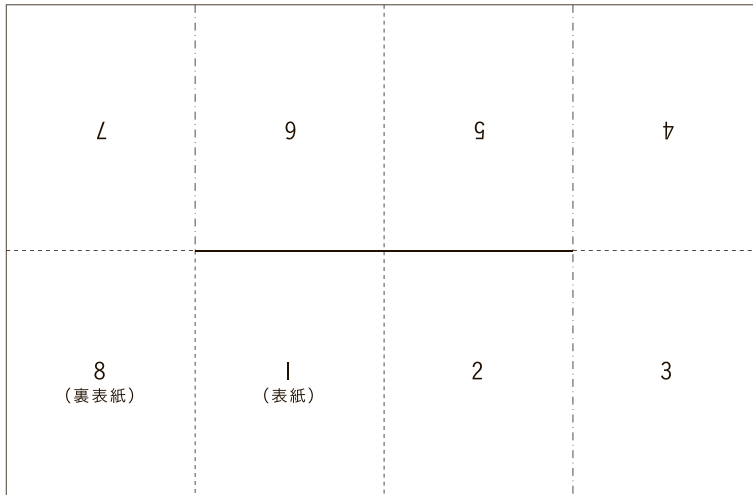
2019年8月22日掲載



被爆から1カ月後。父が下痢をして寝込んだかと思うと、間もなく死んでしまった。放射能を浴びていたのだろう。近くに転がっていた材木をかき集め、父の遺体を雨戸に乗せて燃やした。火葬が珍しかったのか、米兵がカメラで撮影していた。でも怒りすらわかなかった。父が死んだことに何も考えられず、ただぼうぜんと炎を見つめるばかりだった。

大串和雄(84)

2020年10月8日掲載



- 切り線
- 山折り
- 谷折り

つくりかた

中央の実線部分に切り込みを入れ、山折り・谷折りの点線にしたがって新聞紙を折ると、8ページの冊子になります。身近な場所に保管して読み返したり、家族や友人との会話のきっかけにしていただけたら幸いです。

長崎新聞社が1996年から取材を続けている被爆者のインタビュー「私の被爆ノート」はこちらから全ての記事を読むことができます。

